表4-2-10　行動発達

	第１因子	第２因子	第３因子	共通性
5) お酒を飲んでみることがあった。	**.865**	-.063	-.074	.672
4) タバコを吸ってみることがあった。	**.853**	.008	-.029	.718
11) 夜遅くまで家に帰らないで遊ぶことがあった。	**.734**	.097	-.007	.607
6) ルールや規則を破ることがあった。	**.722**	-.010	.067	.552
10) 人からお金や物をとりあげることがあった。	-.090	**.882**	-.102	.689
9) 他人やお店の物を盗む（とる）ことがあった。	-.024	**.749**	.038	.561
8) 人に暴力をふるうことがあった。	.091	**.731**	.032	.616
7) いじめに加わることがあった。	.116	**.608**	.052	.468
2) 一人で閉じこもり、誰とも会いたくないことがあった。	-.090	-.004	**.913**	.786
1) 学校へ行きたくないことがたびたびあった。	.020	-.027	**.855**	.732
3) 家を飛び出すことがあった。	.372	.105	.437	.505
寄与	2.067	1.816	1.566	6.910
寄与率（%）	18.8	16.5	14.2	49.5

因子間相関

	第１因子	第２因子	第３因子
第１因子			
第２因子	.433		
第３因子	.329	.249	

→（第１因子）「外在的行動問題：非行」尺度（α＝.81）
（第２因子）「外在的行動問題：攻撃性」尺度（α＝.75）
（第３因子）「内在的行動問題」尺度（α＝.73）

表4-2-11　就労と子育てについての意識

	第１因子	第２因子	共通性
3) 子どもが小さいうち（3歳くらいまで）は、人に預けないで親が育てるべきだと思う。	**.872**	.124	.738
4) 女性は、子どもが小さいうち（3歳くらいまで）は家庭で子育てに専念し、大きくなってから働くのがよい。	**.866**	.083	.732
2) 女性は子どもが生まれたら子育てに専念し仕事をすべきではない。	**.734**	-.139	.594
1) 女性が子育てをしながら仕事をするのはよいことだ。	**-.616**	.198	.461
6) 男性が子育てをするのは当然だ。	.057	**.815**	.651
7) 男性が育児休業をとるのはよいことだ。	.019	**.759**	.571
5) 男性は仕事に専念し、子育ては女性にまかせていればよい。	.149	**-.648**	.477
寄与	2.384	1.691	4.228
寄与率（%）	34.1	24.2	58.3

因子間相関＝-.172
→（第１因子）「三歳児神話の肯定」尺度（α＝.79）
（第２因子）「伝統的性役割観からの自由度」尺度（α＝.62）

表4-2-12　保育についての一般的評価

	第１因子	第２因子	共通性
5) １歳から保育園に通わせてもよい。	**.897**	.058	.779
4) ０歳から保育園に通わせてもよい。	**.890**	.107	.749
7) 子どもが小さいうち（3歳くらいまで）から保育園など親以外の人によって育てられる機会をもつことは、子どもの発達にとってよい影響があると思う。	**.600**	-.184	.457
9) 子どもが小さいうち（3歳くらいまで）に親以外の人によって育てられる経験があることは、子どもにとって大切だ。	**.586**	-.152	.418
2) 保育園には通わせないのがよい。	.079	**.856**	.701
3) 子どもを通わせるのは、保育園よりも幼稚園のほうがよい。	-.021	**.607**	.377
8) 子どもが小さいうち（3歳くらいまで）から保育園など親以外の人によって育てられる機会をもつことは、子どもの発達にとって悪い影響があると思う。	-.280	.332	.242
6) ３歳から保育園に通わせてもよい。	.334	-.396	.344
1) 保育園に通わせることはよいことだ。	.069	**-.780**	.644
寄与	2.301	1.885	4.715
寄与率（％）	25.6	20.9	46.5

因子間相関＝-.285

→（第１因子）「低年齢児保育の肯定」尺度（α＝.77）

（第２因子）「保育所保育への肯定的評価」尺度（α＝.66）

表4-2-13　乳幼児期における親としての応答性

	第１因子	共通性
2) 子どもの話や活動に注意を向け、きちんと反応するようにしていた。	**.772**	.596
1) 子どもの気持ちを読みとろうと心がけていた。	**.708**	.501
10) 子どもをゆったりと受け入れながら、子どもが自分で考え、自分で行動できるように励ましていた。	**.672**	.452
4) 子どもの興味に合わせて活動を促すようにしていた。	**.671**	.450
7) 子どもと感情を共有していた。	**.603**	.364
9) 悪いことは悪いと子どもが理解できるようにきちんと伝えていた。	**.570**	.325
3) 子どもをむやみに管理しようとしていた。	-.274	.075
5) 子どもの調子がよくないときや、活動に気持ちが向いていないときでも、親のペースを変えなかった。	**-.403**	.162
8) 子どもに合った適切な刺激を与えるように配慮していなかった。	**-.484**	.234
6) 子どもが興味を持っているものや喜ぶものを理解していなかった。	**-.570**	.325
寄与	3.488	3.488
寄与率（％）	34.9	

→　「乳幼児期における親としての応答的かかわり」尺度（α＝.78）

４－３－１．主な変数間の相関

上記の因子分析に基づいて生成された主な量的変数について、Pearsonの積率相関係数を算出した（表4-3-1）。サンプルサイズが大きく、低い相関係数でも有意となってしまうため、主として絶対値が0.3以上のもの（いずれも p<.0001）（表中の太字）について考察を加えることとする。

(1)保育経験についての認知

「保育経験に対する肯定的評価」の高さ、すなわち乳幼児期における自身の保育園（幼稚園）経験について楽しかったと認知していることと、乳幼児期における「保育者との関係の安定性」の認知との間に比較的高い相関が見られた（r=.62）。保育園（幼稚園）が楽しかったという認知には、保育者に優しく接してもらった思い出や、一緒に楽しく遊んだ思い出など、保育

者との安定した関係性についての認知が関連していると考えられる。また、「保育経験に対する肯定的評価」は、「母親以外の二次的対象による寂しさの軽減」と正の相関が見られ（r=.32)、母親との分離に際して関わってくれる大人がいたこと、保育所や幼稚園で友達と遊ぶのが楽しかった、という認知が、自らの保育経験についての肯定的な評価と関連していることが示された。これらの結果は、自らの保育経験について「楽しかった」「よかった」という肯定的評価は、保育者および仲間との楽しい思い出に基づいたものであることを示唆している。

さらに、「保育経験に対する肯定的評価」と「内在的行動問題」との間に負の相関が見られ（r=-.30)、自身の保育経験について肯定的に評価をしている人は、ひきこもり傾向や不登校傾向が低いことが示された。現在の適応が高いことによって過去をポジティブに想起できるのか、あるいは実際に保育経験が楽しかったことが現在の適応のよさを導いているのか、本調査のような横断データでは明らかにすることができないが、少なくとも関連のあることが示された。

(2)現在の親子関係

「(現在の）父子関係の安定性」は、幼少期において父親は普段からよく関わってくれた、という認識(「父親の普段のゆとりある関わり」)と関連していた（r=.64)。同様に、現在の「母子関係の安定性」は、幼少期の「母親の普段のゆとりある関わり」と関連していた（r=.58)。回顧データであるため、実際に幼少期においてそのようなゆとりのある応答的な関わりがどの程度行われていたかを確かめることはできないが、少なくとも「子どものころ、親は忙しくてもよくかかわってくれた」と認識していることが、子ども時代から数十年を経ても親子関係の安定に関連していることが示唆された。

また、現在の親子関係と被虐待経験との間に関連が見られた。現在の「父子関係の安定性」はこれまでの「父親による虐待経験」と、現在の「母子関係の安定性」はこれまでの「母親による被虐待経験」とそれぞれ負の相関（r=-.44, r=-.44）が見られた。同様の相関関係は「保育者との関係の安定性」と「保育者による被虐待経験」との間にも見られており（r=-.40)、対人関係の種類を問わず、虐待は関係の安定性を著しく脅かすことが示唆された。

さらに、「父親による虐待」と「母親による虐待」には比較的高い正の相関が見られ（r=.39)、虐待がおこる場合、一方の親のみならず両親からの虐待を受けることが比較的多いということが示唆されている。また、「父子関係の安定性」と「母子関係の安定性」には正の相関がある（r=.38）ことからも、それぞれの親との関係性が、父子・母子という個々の関わりだけでなく、父・母・子の三者関係、あるいは夫婦関係やきょうだい関係なども含めた複雑な家族の交互作用の中で形成されていることが示唆されている。このような家庭における関係性の質的連鎖には、家庭の情緒的風土（emotional climate）が深く関連しているものと考えられる。以上の結果は、子どもを対象とした調査データの分析結果とも一致しており、親子関係の形成とその安定には、世代を超えた同様のメカニズムがあるものと考えられる。

(3)社会情緒的発達・行動発達

未成年の時期における不登校傾向や引きこもり傾向を表す「内在的行動問題」は、現在の「対人関係における適応」との間に負の相関（r=-.32）が見られた。非行や攻撃行動に関連した「外在的行動問題」は、他の社会情緒的発達の指標との間に高い相関が見られなかったが、「内在的行動問題」は、現在の母子関係の安定性（r=-.30）や過去の保育者との関係の安定性（r=-.35）とも関連が見られ、過去から現在までの対人関係の困難と関連があることが示唆された。また、「対人関係における適応」と「自尊心」との間には正の相関があり（r=.49)、身

表4-3-1 主な変数間の相関係数＜保護者データ＞

	年齢	母の就労の肯定	保育者の記憶	保育経験の評価	分離時の父親希求	父親ゆとりある関わり	父親しさの軽減	分離時の母親希求	母親ゆとりある関わり	母親しさの軽減	父子関係の安定性	母子関係の安定性	保育者関係の安定性	父親による虐待	母親による虐待	保育者による虐待	親からの虐待未解決	保育者からの虐待未解決	子どもへの虐待	対人関係に適応	自尊心	外在的行動問題(攻撃)	外在的行動問題(非行)	内在的行動問題	行動問題	性役割観の自由度	3歳児神話の肯定	伝統的性役割観の肯定	3歳からの保育の肯定	低年齢保育の肯定	親としての応答的関わり
年齢																															
母の就労の肯定	.03																														
保育者の記憶	-.02	.11																													
保育経験の評価	-.01	.23	.30																												
分離時の父親希求	-.07	.06	.00	-.04																											
父親ゆとりある関わり	.02	.02	.14	.18	-.07																										
父親しさの軽減	.00	.20	.10	.28	-.11	-.03																									
分離時の母親希求	-.05	.20	.00	-.03	.31	-.20	.01																								
母親ゆとりある関わり	.05	.04	.10	.21	-.15	.32	.07	-.19																							
母親しさの軽減	.00	.19	.13	.32	-.07	.03	.51	-.04	-.01																						
父子関係の安定性	.08	.10	.18	.24	-.03	.64	.04	-.19	.31	.12																					
母子関係の安定性	.08	.17	.10	.23	-.13	.18	.17	-.02	.58	.06	.38																				
保育者関係の安定性	.09	.18	.31	.62	-.13	.23	.20	-.12	.27	.25	.38	.37																			
父親による虐待	-.06	-.10	-.06	-.07	.04	-.28	-.06	.07	-.12	-.08	-.44	-.21	-.15																		
母親による虐待	-.07	-.06	.00	-.09	.12	-.03	-.07	.03	-.33	-.09	-.12	-.44	-.17	.39																	
保育者による虐待	-.04	-.02	-.01	-.26	.08	-.07	-.12	.04	-.12	-.09	-.11	-.22	-.40	.25	.28																
親からの虐待未解決	-.09	-.07	-.05	-.11	.07	-.23	-.08	.10	-.32	-.07	-.38	-.45	-.21	.51	.51	.26															
保育者からの虐待未解決	-.06	-.05	-.01	-.25	.05	-.12	-.10	.07	-.13	-.06	-.18	-.23	-.42	.21	.25	.66	.40														
自分の子どもへの虐待	-.09	-.04	-.08	-.15	.05	-.09	.00	.08	-.21	.00	-.17	-.20	-.16	.37	.44	.25	.32	.21													
対人関係における適応	.03	.07	.17	.20	-.08	.20	.10	-.13	.23	.08	.27	.26	.31	-.16	-.15	-.13	-.21	-.13	-.23												
自尊心	.07	.04	.16	.16	-.10	.16	.12	-.11	.22	.06	.21	.25	.24	-.11	-.09	-.07	-.17	-.10	-.21	.49											
外在的行動問題(攻撃性)	-.13	-.07	-.07	-.09	.13	-.11	-.07	.07	-.11	-.04	-.17	-.21	-.16	.27	.24	.21	.26	.23	.21	-.10	-.10										
外在的行動問題(非行)	-.17	-.05	-.04	-.08	.07	-.12	-.04	.02	-.10	.01	-.16	-.18	-.12	.21	.17	.11	.18	.14	.16	-.10	-.05	.47									
内在的行動問題	-.09	-.03	-.10	-.30	.07	-.17	-.09	.12	-.22	-.11	-.26	-.30	-.35	.20	.25	.21	.29	.24	.25	-.32	-.24	.24	.29								
性役割観の自由度	-.06	.09	.04	.05	-.01	.02	.09	.04	-.03	.03	.01	.03	.04	.04	.08	-.04	.05	-.01	.07	.03	.10	-.06	-.04	-.01	-.06						
3歳児神話の肯定	.07	-.12	.01	-.08	.07	-.03	-.07	.07	-.04	-.08	-.07	-.05	-.08	.04	.04	.01	.08	.05	.04	-.12	-.11	.02	.01	.10	.06	-.21					
低年齢保育の肯定	-.08	.12	.01	.12	.02	-.02	.06	.02	-.02	.10	-.02	-.02	.07	.08	-.01	.02	.04	.00	.02	.04	.04	.09	.08	.01	.08	.10	-.50	-.43			
保育所保育の肯定	.05	.10	.02	.14	-.09	-.03	.09	-.01	.04	.13	.02	.11	.15	-.02	-.08	-.07	-.02	-.04	-.06	.04	.05	-.03	.00	-.06	-.04	.12	-.32	-.31	.33		
親としての応答的関わり	.03	.05	.19	.26	-.06	.17	.12	.00	.24	.08	.18	.25	.24	-.07	-.12	-.08	-.10	-.07	-.21	.25	.30	-.18	-.14	-.15	-.21	.09	.04	-.01	-.03	-.01	

近な他者との関係においてよりよく適応していることと、自尊心の高さとは連動していることが示唆されている。

4－3－2．保育についての評価や態度に関わる変数間の相関

子どもの保護者として利用した保育（保育所、幼稚園）について、子どもの入園時、入園１年後、卒園時それぞれの時点で、どの程度信頼していたか、回顧的に回答を求めた。それらの変数と、保護者自身が子ども時代に経験した保育についての評価、自身の母親の就労についての態度、自身の性役割観や三歳児神話についての意識、保育に対する一般的な態度、親としての子どもへの関わりについての認知、の各変数について、Pearsonの積率相関係数を算出した（表4-3-2）。

表 4-3-2 保育についての評価や態度に関わる変数間の相関＜保護者データ＞

	母の就労の肯定	保育経験の評価	保育所への信頼（入園時）	保育所への信頼（入園1年後）	保育所への信頼（卒園時）	幼稚園への信頼（入園時）	幼稚園への信頼（入園1年後）	幼稚園への信頼（卒園時）	性役割観の自由度	3歳児神話の肯定	低年齢保育の肯定	保育（3歳～）の肯定	親としての応答的関わり	自分の子どもへの虐待	対人関係における適応	自尊心
(自身の)母の就労の肯定																
(自身の)保育経験の評価	.23															
保育所への信頼(入園時)	.11	.25														
保育所への信頼(入園1年後)	.16	.28	**.78**													
保育所への信頼(卒園時)	.16	.27	**.63**	**.82**												
幼稚園への信頼(入園時)	.06	.22	**.44**	**.54**	**.49**											
幼稚園への信頼(入園1年後)	.11	.27	**.33**	**.53**	**.48**	**.71**										
幼稚園への信頼(卒園時)	.09	.28	**.40**	**.50**	**.50**	**.70**	**.86**									
性役割観の自由度	.09	.05	-.01	.04	.05	.08	.10	.09								
3歳児神話の肯定	-.12	-.08	-.14	-.19	-.17	-.06	-.07	-.05	-.21							
低年齢保育の肯定	.12	.12	.10	.19	.16	.03	.06	.04	.10	**-.50**						
保育所保育の肯定	.10	.14	**.33**	**.41**	**.41**	.09	.10	.07	.12	**-.32**	**.33**					
親としての応答的関わり	.05	.26	.12	.16	.20	.22	.26	.27	.09	.04	-.03	-.01				
自分の子どもへの虐待	-.03	-.13	-.12	-.13	-.13	-.06	-.05	-.07	.07	.04	.02	-.06	-.21			
対人関係における適応	.07	.20	.18	.22	.21	.17	.21	.21	.03	-.12	.04	.04	.25	-.23		
自尊心	.04	.16	.17	.21	.17	.12	.14	.16	.10	-.11	.04	.05	**.30**	-.21	**.49**	

(1)子どもの保育への信頼

子どもの保護者として利用した保育への信頼は、保育所、幼稚園とも入園時、入園１年後、卒園時のいずれの組み合せにおいても高い正の相関を示しており（r=.63～86)、回顧データであることを考慮しなければならないが、入園時から卒園時までかなり一貫していたと考えられる。また、保育所と幼稚園の両方を利用した保護者においては、保育所への信頼と幼稚園への信頼との相関が比較的高く（r=.33～.54)、各施設（保育所・幼稚園）内での入園から卒園までの関連よりは低いものの、施設を変わっても保護者の保育への信頼にはある程度の連続性があることが示唆された。

(2)子どもの保育への信頼と自身の保育経験の評価

保護者自身が子ども時代に経験した保育に対する肯定的評価と、親として子どもを通わせた保育への信頼との間には、保育所、幼稚園のいずれにおいても、有意ではあるが低い相関しか見られなかった（r=.22～.28)。したがって、親として子どもを通わせた保育への信頼の高さは、保護者自身が子ども時代に経験した保育に対する評価の高さ、すなわち保育に対するイメージや評価の、いわば「初期値」ではなく、成長後に実際に子どもを通わせた保育、親として利用した保育に対する直接的な評価に基づいて決定されているものと推測される。

(3)子どもの保育への信頼と保育所保育への評価

子どもの入園時、入園１年後、卒園時における保育所への信頼と、現在の保育所保育（主に３歳からの保育）への肯定的評価との間に中程度の正の相関が見られた（それぞれr=.33, .41, .41)。幼稚園への信頼との間にはそのような関連は見られない（それぞれr=.09, .10, .07）ため、実際に保育所を利用し、その保育への信頼が高かったことによって、保育所保育についての一般的評価が高まったという可能性がある。もちろん、もともと保育に対する評価が高かった人が、子どもに保育所を選んだとの可能性もある。しかし、自らの保育経験の評価と、保育所保育の肯定との間には有意な相関は見られない（r=.14）ことから、やはり親として利用した保育への信頼が高かったことによって、保育所保育についての一般的評価が高まったと考えられるであろう。

(4)子どもの保育への信頼と親としての応答的関わり

子どもが経験した保育への信頼と、子どもの乳幼児期における親としての応答的関わりとの間には、特に保育所を利用した保護者において高い相関は見られなかった（r=.12, .16, .20)。保育所を利用する保護者が、親としての敏感性や応答性を発揮するためには、信頼できる保育にめぐり会うことだけでは不十分であることを示唆しているといえるであろう。保育におけるサポートはもちろんであるが、家庭内での夫婦の協同、地域の子育て支援などが、親としての敏感で応答的な養育態度・行動を促進していくために必要かつ有効であると考えられる。

４－４．保育経験による比較

保護者自身の乳幼児期における保育経験は、①０歳から保育所９名（0.4%)、②１～３歳前から保育所43名（2.1%)、③３歳から保育所923名（44.8%)、④幼稚園779名（37.8%)、⑤保育所だが入所時期不明69名（3.4%)、⑥保育所と幼稚園の両方を経験38名（1.8%)、⑦その他102名（5.0%)、⑧保育経験なし96名（4.7%)、無記入56名であった（**表4-4-0**)。

以下の分析においては、保育所保育の経験の有無および保育開始時期（入所時期）による差異を検討する。その際、①は１カテゴリーとして扱うには人数が少ないため、②～④の３群を取り上げる。

就労と子育ておよび保育についての認知、親子関係、社会情緒的発達、行動発達の諸変数を

従属変数とし、保育経験（３水準）による一元配置の分散分析を行い、保育経験によって各従属変数の平均値に差異が見られるかどうかを検討した（**表4-4-1～表4-4-24**）。多重比較においては、Scheffeの方法およびTukeyの方法を用い、方法により結果が異なる場合はその旨明記した。群間に有意な差異が見られたものについては、図示した（**図4-4-1～図4-4-23**）。ただし、群間のサンプルサイズの違いが大きく、統計的検定の信頼性については慎重に検討すべきである。

(1)（自分の）母親の就労の肯定（表4-4-1）

全体として有意な結果が得られたが（$F(2,1144)=3.08$; $p=.0466$）、多重比較の結果５％水準でいずれも有意でなかった。乳幼児期における母親の就労に対する「楽しそうだった」「いきいきしていた」「誇りに思っていた」といった肯定的な認識には、保育経験による差異は見られなかった。

(2)保育経験に対する肯定的評価（表4-4-2）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(2,1569)=0.91$; $p=.4035$ n.s.）。自らの保育経験に対する「楽しかった」「行ってよかった」との評価には、保育経験による差異は見られなかった。

(3)分離時における父親希求（表4-4-3）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(2,1634)=0.37$; $p=.6917$ n.s.）。父親に対して「いつも家にいてほしかった」「帰りが遅くて寂しかった」といったように寂しさや心配を感じ、分離時に父親を求める傾向には、保育経験による差異は見られなかった。

(4)父親の普段のゆとりある関わり（表4-4-4）

全体として有意な結果が得られ（$F(2,1622)=8.71$; $p=.0002$）、多重比較の結果、幼稚園＞３歳から保育所、という有意差が見られた。幼稚園群は３歳から保育所に通った群に比べ、父親が休みの日にはよく関わってくれるなど、ゆとりあるかかわりをしてくれたと認識していることが示された。

(5)父親以外の二次的対象による寂しさの軽減（表4-4-5）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(2,1601)=2.35$; $p=.0961$ n.s.）。父親以外の大人や友達といった二次的対象と関わることによって、父親との分離時に寂しさを感じなかった、という認識は、保育経験による差異が見られなかった。

(6)分離時における母親希求（表4-4-6）

全体として有意な結果が得られ（$F(2,1603)=19.72$; $p<.0001$）、多重比較の結果、１～３歳前から保育所、３歳から保育所＞幼稚園、という有意差が見られた。１～３歳前から保育所に通った群および３歳から保育所に通った群は、幼稚園群に比べて母親との分離に寂しさや心配を感じ、母親を求める傾向が高かったと認知していることが示された。

(7)母親の普段のゆとりある関わり（表4-4-7）

全体として有意な結果が得られ（$F(2,1637)=8.88$; $p=.0001$）、多重比較の結果、幼稚園＞３歳から保育所、という有意差が見られた。幼稚園群は３歳から保育所に通った群に比べ、母親が休みの日にはよく関わってくれるなど、ゆとりあるかかわりをしてくれたと認識していることが示された。

(8)母親以外の二次的対象による寂しさの軽減（表4-4-8）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(2,1577)=2.79$; $p=.0616$ n.s.）。母親以外の大人や友達といった二次的対象と関わることによって、母親との分離時に寂しさを感じなかった、という認識は、保育経験による差異が見られなかった。

(9)父子関係の安定性（表4-4-9）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(2,1517)=1.97$; $p=.1399$ n.s.）。保育経験の違いによって、現在の父子関係の安定性に差異は見られなかった。

(10)母子関係の安定性（表4-4-10）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(2,1538)=0.09$; $p=.9168$ n.s.）。保育経験の違いによって、現在の母子関係の安定性に差異は見られなかった。

(11)保育者との関係の安定性（表4-4-11）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(2,1472)=1.35$; $p=.2584$ n.s.）。保育経験の違いによって、過去の保育者との関係の安定性に差異は見られなかった。

(12)父親による虐待（表4-4-12）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(2,1390)=0.21$; $p=.8091$ n.s.）。保育経験の違いによって、父親による虐待の認識に差異は見られなかった。

(13)母親による虐待（表4-4-13）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(2,1410)=0.97$; $p=.3783$ n.s.）。保育経験の違いによって、母親による虐待の認識に差異は見られなかった。

(14)保育者による虐待（表4-4-14）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(2,1394)=2.23$; $p=.1083$ n.s.）。保育経験の違いによって、保育者による虐待の認識に差異は見られなかった。

(15)対人関係における適応（表4-4-15）

全体として有意な結果が得られ（$F(2,1643)=6.26$; $p=.0020$）、多重比較の結果、幼稚園＞3歳から保育所という有意差が見られた。幼稚園に通った群は、3歳から保育所に通った群よりも現在の対人関係における適応がよいと認識していることが示された。

(16)自尊心（表4-4-16）

全体として有意な結果が得られ（$F(2,1622)=5.50$; $p=.0041$）、多重比較の結果、幼稚園＞3歳から保育所という有意差が見られた。幼稚園に通った群は、3歳から保育所に通った群よりも現在の自尊心が高かった。

(17)外在的行動問題（攻撃性）（表4-4-17）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(2,1687)=1.17$; $p=.3099$ n.s.）。保育経験の違いによって、未成年の時期における攻撃的な行動問題に差異は見られなかった。

(18)外在的行動問題（非行）（表4-4-18）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(2,1683)=1.01$; $p=.3636$ n.s.）。保育経験の違いによって、未成年の時期における非行に関わる行動問題に差異は見られなかった。

(19)内在的行動問題（表4-4-19）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(2,1693)=1.24$; $p=.2884$ n.s.）。保育経験の違いによって、不登校傾向や引きこもり傾向を表す内在的行動問題に差異は見られなかった。

(20)伝統的性役割観からの自由度（表4-4-20）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(2,1690)=0.62$; $p=.5369$ n.s.）。保育経験の違いによって、伝統的性役割観からの自由度に差異は見られなかった。

(21)三歳児神話の肯定（表4-4-21）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(2,1685)=0.40$; $p=.6716$ n.s.）。保育経験の違いによって、三歳児神話を肯定する意識に差異は見られなかった。

(22)低年齢児保育の肯定（表4-4-22）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(2,1558)=2.42$; $p=.0897$ n.s.）。保育経験の違いによって、低年齢児保育に対する一般的な評価に差異は見られなかった。

(23)保育所保育（主に3歳以降）の肯定（表4-4-23）

全体として有意な結果が得られ（$F(2,1608)=29.62$; $p<.0001$）、多重比較の結果、3歳から保育所＞幼稚園、という有意差が見られた。3歳から保育所での保育を経験した群は、幼稚園群に比べて、保育所保育に対して肯定的な認識を持っていることが示された。

(24)親としての応答的かかわり（表4-4-24）

全体として有意な結果は得られなかった（F

(2,1259)=1.35; p=.2592 n.s.)。保育経験の違いによって、子どもが乳幼児期に親として応答的に関わることができたという認識に差異は見られなかった。

保育経験とその後の発達との関連

上記（1）～（24）より明らかになった結果についてまとめ、考察する。

①就労と子育て、保育所保育についての認識

保育経験の違いによって、就労と子育てについての認識、および保育所保育についての認識にはほとんど差異が見られなかった。保育所保育（主に3歳以降）についての肯定的な意識については、自身が3歳から保育所に通った群が幼稚園に通った群よりも高いという結果が得られ（**表4-4-23**）、保育所保育についての一般的な態度や意識の形成が、自身の保育経験の影響をある程度受けて行われるという可能性も示唆された。しかし、他の変数についてはいずれも有意な群間差は見られず、伝統的な性役割観や三歳児神話についての意識は、自身の保育経験やその背景にある家族のあり方によって規定されるというよりも、その後の様々な経験によって獲得された価値観であることが推測される。

昨年度の子ども調査の結果では、中高生の子育てと就労に関する価値観や信念体系、および保育所保育についての認識や評価は、自分の家族（親個人・夫婦としての親など）のあり方や自らの保育経験に裏づけられた形で発達していくことが示唆された。したがって、今回の分析の対象となった保護者も、少なくとも思春期・青年期までは、自らの保育経験によって就労と子育てについての価値観が形成されていたのかもしれない。しかし、子育てをしている成人期の現在、それらの価値観や信念体系に自身の保育経験による差異が見られないというこの結果は、思春期・青年期以後、何らかの要因によって、これらの価値観や信念体系の改変、再形成が起こるということを示唆しているのではないだろうか。成人期以降になって子育てと就労に関する価値観の再形成を生じさせる要因としては、自らが親として子育てをする経験がまず第一に挙げられるであろう。例えば、自らは幼児期になってから幼稚園に通った経験を持ち、低年齢からの保育に否定的な価値観を持っていた人が、親として乳児保育を利用した経験を通して低年齢からの保育に肯定的な態度を持つようになる、といった変化もありうるのではないだろうか。そこで、親として就労と子育てについてはどのような選択をし、その結果として子どもにどのような保育を経験させたかということと、就労と子育てについての現在の価値観との間にはどのような関連があるのか、さらに分析する必要がある。（この点については、**4－6．子どもの保育経験による比較**において後述する。）

②親子関係

保育経験の違いによって、現在の親子関係の安定性や親による被虐待経験に差異は見られなかった。すなわち、乳幼児期においてどのような保育をいつ頃から経験したかということは、親からの虐待についての回顧的な認識や、数十年後の現在の親子関係がどの程度安定しているかという認知との間に関連が見られないことが示された。この結果は、成人期における親子関係の安定性は、少なくとも児童期以降の様々な親子の関わりの蓄積によって規定される部分が大きいということを示唆している。例えば、思春期の第二次反抗期における親子関係の再構築がどのようになされたのか、成人期になり自らが親になるという経験を通して親との関係はどのように変化したのか、あるいは親が老いていくという状況をいかに受け入れ、親についての認知がどのように変化しつつあるのか、といったことが、現在の親子関係の認知に反映されていると考えられる。

また、保育経験の違いによって、自身が親として子どもと関わる際にどの程度応答的なかか

わりができていたと思うかという認識に差異は見られなかった。親としてのかかわりは、遠い過去の保育経験によって規定されるのではなく、それ以外の要因、例えばパーソナリティ、養護性、周囲のサポート、子どもの特徴などにより強く規定されるものと考えられる。

③社会情緒的発達

対人関係における適応および自尊心は、いずれも幼稚園群が3歳から保育所群よりも高いという結果が得られた。しかしこの結果から、現在の対人関係における適応や自尊心は乳幼児期の保育経験の違いに起因する、といった単純な因果関係を想定してもよいのであろうか。現在の対人関係における適応の良さと自尊心の高さとの間には比較的高い正の相関があり（r=.49）（表4-3-1）、両変数の背後には共通の要因が介在している可能性があるが、果たしてその要因が乳幼児期の保育経験なのであろうか。保護者にとってかなり遠い過去である数十年前の保育経験が、現在までの長期にわたって対人適応や自尊心に対して説明力を持つというのであればそれは重大なことである。しかし、おそらくそれは妥当な推論ではない。

現在の対人関係における適応および自尊心との間に有意な相関が見られたのは、子どもが乳幼児であった時期に親としていかに応答的なかかわりをしたと認知しているか（「親としての応答的かかわり」）（それぞれr=.25、r=.30）、あるいは内在的行動問題（それぞれr=-.32、r=-.24）であった。その一方で、乳幼児期の保育経験に関連する変数である「分離時における父親（母親）希求」「父親（母親）以外の二次的対象による寂しさの軽減」は、対人関係における適応とも自尊心の高さとも有意な相関は見られなかった（r=-.13 ～.12）。したがって、対人関係における適応と自尊心の背景にあるのは、幼少時の保育経験やそれにまつわる父母についての認識というよりも、むしろ、成長後の親としての有能感やそれに直接関与する対人的なサポートの要因、あるいは、内在的な行動問題とそれをもたらすパーソナリティの要因や社会的・対人的な環境の要因なのではないかと推測される。これらについては、今後さらに検討が必要である。

④行動発達

攻撃的行動問題や非行に関わる外在的行動問題、不登校傾向や引きこもり傾向に関わる内在的行動問題は、いずれも保育経験による差異は見られなかった。これらの行動問題は、未成年の時期を回顧して回答されたものであるが、少なくとも保護者自身の認知において、未成年の時期における外在的・内在的行動問題と保育経験とは関連がないことが示された。

4－5．母親の就労による比較

保護者自身の乳幼児期における母親の就労は、就労開始時の保護者の年齢および就労形態によって以下のように分類された。①0歳から就労685名（34.5%）、②1～3歳前から就労101名（5.1%）、③3歳から就労150名（7.6%）、④専業主婦697名（35.1%）、⑤農業・自営業・内職190名（9.6%）、⑥わからない129名（6.5%）、⑦その他34名（1.7%）、無記入129名であった（表4-5-0）。

以下の分析においては、乳幼児期における母親の就労の有無および就労開始時期による差異を検討するため、①～⑤の5群について検討する。

就労と子育ておよび保育についての認知、親子関係、社会情緒的発達、行動発達の諸変数を従属変数とし、母親の就労（5水準）による一元配置の分散分析を行い、乳幼児期における母親の就労によって各従属変数の平均値に差異が見られるかどうかを検討した（表4-5-1～表4-5-24）。多重比較においては、Scheffeの方法およびTukeyの方法を用い、方法により結果が異なる場合はその旨明記した。群間に有意な差異が見られたものについては、図示した（図4-5-

1～図4-4-24)。ただし、４－４．と同様に群間のサンプルサイズの違いが大きく、統計的検定の信頼性については慎重に検討すべきである。

(1)（自分の）母親の就労の肯定（表4-5-1）

全体として有意な結果が得られ（$F(4,1184)=15.71$; $p<.0001$)、多重比較の結果、０歳から就労・１～３歳前から就労・３歳から就労・自営業（農業・内職を含む）＞専業主婦、という有意差が見られた。母親が就労していた群は、専業主婦群に比べて、乳幼児期における母親の就労を「楽しそうだった」「いきいきしていた」「誇りに思っていた」といったように肯定的に認識していることが示された。

(2)保育経験に対する肯定的評価（表4-5-2）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(4,1555)=2.10$; $p=.0781$ n.s.)。

(3)分離時における父親希求（表4-5-3）

全体として有意な結果が得られ（$F(4,1626)=3.11$; $p=.0147$)、多重比較の結果、Tukeyの方法のみ、０歳から就労・１～３歳前から就労・専業主婦＞自営業（農業・内職含む)、という有意差が見られた。母親が３歳以前から就労していた群や専業主婦だった群は、母親が農業・自営業・内職だった群に比べて、父親に対して「いつも家にいてほしかった」「帰りが遅くて寂しかった」といったように寂しさや心配を感じ、分離時に父親を求める傾向が高かったと認知していることが示された。

(4)父親の普段のゆとりある関わり（表4-5-4）

全体として有意な結果が得られ（$F(4,1614)=4.85$; $p=.0007$)、多重比較の結果、専業主婦＞０歳から就労・自営業（農業・内職を含む)、という有意差が見られた。母親が専業主婦であった群は、０歳から就労していた群および農業・自営業・内職であった群に比べて、父親が休みの日にはよく関わってくれたなど、ゆとりあるかかわりをしてくれたと認識していることが示された。

(5)父親以外の二次的対象による寂しさの軽減（表4-5-5）

全体として有意な結果が得られ（$F(4,1594)=3.23$; $p=.0118$)、多重比較の結果、Tukeyの方法のみ５％水準で、自営業（農業・内職含む）・専業主婦＞３歳から就労、という有意差が見られた。母親が自営業（農業・内職含む）または専業主婦だった群は、３歳から母親が就労していた群に比べて、父親がいないときも他の大人や友達という二次的対象と関わることによって「寂しくなかった」「(父親との分離が）気にならなかった」と認知していることが示された。

(6)分離時における母親希求（表4-5-6）

全体として有意な結果が得られ（$F(4,1602)=32.63$; $p<.0001$)、多重比較の結果、０歳から就労・１～３歳前から就労・３歳から就労＞専業主婦・自営業（農業・内職含む)、という有意差が見られた。母親が就労していた群は、専業主婦であった群よりも母親との分離に寂しさや心配を感じ、母親を求める傾向が高かったと認知していることが示された。

(7)母親の普段のゆとりある関わり（表4-5-7）

全体として有意な結果が得られ（$F(4,1629)=27.09$; $p<.0001$)、多重比較の結果、専業主婦＞３歳から就労＞０歳から就労（Scheffeの方法では、専業主婦・３歳から就労＞０歳から就労)、専業主婦＞１～３歳前から就労・自営業（農業・内職含む))、という有意差が見られた。乳幼児期に母親が就労していた群や自営業（農業・内職含む）だった群は、母親が専業主婦だった群に比べて、母親は忙しそうで、せかされることが多かったなど、ゆとりあるかかわりが少なかったと認知していることが示された。

(8)母親以外の二次的対象による寂しさの軽減（表4-5-8）

全体として有意な結果が得られ（$F(4,1569)=7.17$; $p<.0001$)、多重比較の結果、０歳から就労・自営業（農業・内職を含む）＞３歳から就労・専業主婦、という有意差が見られた。０歳

から母親が就労していた群および自営業（農業・内職を含む）だった群は、３歳から就労した群および専業主婦群に比べて、母親がいないときも他の大人や友達と過ごすことによって「寂しくなかった」「(母親との分離が）気にならなかった」と認知していることが示された。

(9)父子関係の安定性（表4-5-9）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(4,1575)=1.74$; $p=.1389$ n.s.）。

(10)母子関係の安定性（表4-5-10）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(4,1613)=2.22$; $p=.0648$ n.s.）。

(11)保育者との関係の安定性（表4-5-11）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(4,1460)=0.81$; $p=.5160$ n.s.）。

(12)父親による虐待（表4-5-12）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(4,1467)=1.57$; $p=.1788$ n.s.）。

(13)母親による虐待（表4-5-13）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(4,1489)=1.54$; $p=.1869$ n.s.）。

(14)保育者による虐待（表4-5-14）

全体として有意な結果が得られたが（$F(4,1428)=2.83$; $p=.0234$）、多重比較の結果、５％水準で有意な差は見られなかった。

(15)対人関係における適応（表4-5-15）

全体として有意な結果が得られ（$F(4,1715)=5.34$; $p=.0003$）、多重比較の結果、自営業（農業・内職を含む）・専業主婦＞０歳から就労、という有意差が見られた。母親が自営業（農業・内職を含む）だった群および専業主婦だった群は、０歳から就労していた群に比べて、現在の対人関係における適応がよいことが示された。

(16)自尊心（表4-5-16）

全体として有意な結果が得られ（$F(4,1692)=3.39$; $p=.0090$）、多重比較の結果、Tukeyの方法のみ、自営業（農業・内職を含む）・専業主婦＞０歳から就労、という有意差が見られた。ただし、Scheffe の方法では有意差は見られなかった。

(17)外在的行動問題：攻撃性（表4-5-17）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(4,1763)=1.09$; $p=.3614$ n.s.）。母親の就労と、未成年の時期における攻撃的な行動問題とは関連が見られなかった。

(18)外在的行動問題：非行（表4-5-18）

全体として有意な結果が得られたが（$F(4,1757)=2.88$; $p=.0215$）、多重比較の結果は５％水準でいずれも有意でなかった。母親の就労と、未成年の時期における非行に関連した行動問題とは関連が見られなかった。

(19)内在的行動問題（表4-5-19）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(4,1767)=1.43$; $p=.2223$ n.s.）。多重比較は有意でなかった。母親の就労と、未成年の時期における不登校傾向や引きこもり傾向とは関連が見られなかった。

(20)伝統的性役割観からの自由度（表4-5-20）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(4,1760)=1.57$; $p=.1806$ n.s.）。乳幼児期における母親の就労によって、「男性が子育てをするのは当然だ」「男性は仕事に専念し、子育ては女性にまかせていればよい（逆転項目）」という意識に差異は見られなかった。

(21)三歳児神話の肯定（表4-5-21）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(4,1753)=1.91$; $p=.1070$ n.s.）。「子どもが３歳になるころまでは、女性は子育てに専念すべきである」といういわゆる“三歳児神話”を肯定する意識は、乳幼児期における母親の就労によって差異が見られないことが示された。

(22)低年齢児保育の肯定（表4-5-22）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(4,1618)=2.19$; $p=.0683$ n.s.）。低年齢（３歳未満）から保育を経験することについての意識は、乳幼児期における母親の就労によって差異が見られないことが示された。

(23)保育所保育（主に３歳以降）の肯定

（表4-5-23）

全体として有意な結果が得られ（$F(4,1680)=3.13$; $p=.0141$）、多重比較の結果、０歳から就労＞専業主婦、という有意差が見られた。母親が０歳から就労していた群は、専業主婦だった群に比べて、保育所保育を肯定的にとらえていることが示された。

(24)親としての応答的かかわり（表4-5-24）

全体として有意な結果が得られ（$F(4,1308)=3.39$; $p=.0090$）、多重比較の結果、専業主婦＞０歳から就労、という有意差が見られた。自身の乳幼児期に母親が専業主婦であった群は、母親が０歳から就労していた群に比べて、自らが親となって子どもに関わる際に、応答的なかかわりをしていたという認識が高いことが示された。

母親の就労とその後の発達との関連

上記（１）～（24）より明らかになった結果についてまとめ、考察する。

①就労と子育て、保育所保育についての認識

乳幼児期における母親の就労の有無および就労開始時期の違いによって、就労と子育てについての認識、および保育所保育についての認識にはほとんど差異が見られなかった。保育所保育（主に３歳以降）についての肯定的な意識については、母親が０歳から就労していた群が専業主婦だった群よりも高いという結果が得られ、保育所保育についての一般的な態度や意識が、母親の就労の影響を受けながら形成されるという可能性が示唆された。しかし、他の変数についてはいずれも有意な群間差は見られず、伝統的な性役割観や三歳児神話についての意識は、自らの保育経験による分析の結果（→ **４－４．保育経験による比較**）と同様に、母親の就労やその背景にある家族のあり方によって規定されるというよりも、その後の様々な経験によって獲得された価値観であることが推測される。

②親子関係

乳幼児期における母親の就労の有無および就労開始時期の違いによって、現在の親子関係の安定性や親による被虐待経験に差異は見られなかったが、乳幼児期における親との関わりについての認知は、いくつかの点で差異が見られた。この結果は、昨年度分析した子ども調査の結果とも一致する。

まず、母親とのかかわりについては、母親が就労していた群はいずれも、専業主婦だった群および農業・自営業・内職群に比べて、乳幼児期の母親との分離に際して寂しさや心配を感じ、母親の帰りを楽しみにし、一緒にいたいと思う傾向が高かったと認知していた。母親が家庭外で就労していた場合、専業主婦や自営業の子どもよりも必然的に分離の時間が長くなり、一緒にいられる時間が限定されていたと考えられるが、そのことが分離時に母親を求める意識の高さの一因となったと考えられる。また、専業主婦だった群に比べて、乳幼児期に母親が就労していた群は、母親が普段からゆとりのあるかかわりをしてくれたという認識が低かった。特に０歳から母親が就労していた群は、そのような認識が低かった。以上の結果から、母親が就労していた群は、母親との分離において母親を求める意識が高く、その一方で母親は忙しくあまり相手をしてくれなかったという認知を持っていることが示された。そのような乳幼児期の経験は、安定した母子関係の形成を妨げることが推測されるが、成人期の現在における母子関係の安定性についての認知には、先述したように群間差が見られなかった。この結果は、昨年度分析を行った子ども調査の結果とも一致している。すなわちこれらの結果は、母親の就労それ自体が、思春期、青年期、成人期における母子関係を阻害するとはいえないということを示している。

父親との関わりについても同様の結果が得ら

れており、母親の就労それ自体が思春期から成人期までの父子関係を阻害するとの証左は得られていない。母親が就労していた群は、たしかに乳幼児期において親との分離に寂しさを感じたり、ゆとりをもって関わってもらったという認識が低い。しかし、思春期から成人期までのいずれの時期においても、現在の親子関係の安定性に、母親の就労による差異は見られない。そこにはおそらく、母親の就労とそれに伴う親子分離の影響を補償するような要因の関与があると考えられる。家族要因、家族の関係性におけるダイナミクス、保育の要因、社会的経験の要因、あるいはアイデンティティの発達や内省的自己の発達など個人内の要因について、今後さらに検討する必要がある。

③社会情緒的発達

母親が0歳から就労していた群は、母親が専業主婦であった群および農業・自営業・内職であった群に比べて、現在の対人関係における適応および自尊心が低かった。「**4－4．保育経験による比較**」においても述べたように、対人関係における適応と自尊心の間には有意な正の相関があり（r=.49)、背後に共通の要因が存在することが推測される。そして、それらの要因は、幼少時における父母についての認識というよりも、むしろ、成長して親になったときの親としての有能感やそれに直接関与する対人的なサポートの要因、あるいは、内在的な行動問題とそれをもたらすパーソナリティの要因や社会的・対人的な環境の要因なのではないかと推測される。この点については、今後さらに検討が必要である。

④行動発達

攻撃的な行動問題や非行に関わる外在的行動問題、不登校傾向や引きこもり傾向に関わる内在的行動問題は、多重比較の結果、いずれも母親の就労による群間差が見られなかった。これらの行動問題は、未成年の時期を回顧して回答されたものであるが、少なくとも保護者自身の認知において、未成年の時期における外在的・内在的行動問題と乳幼児期における母親の就労とは関連がないことが示された。

4－6．子どもの保育経験による比較

上記の**4－4．保育経験による比較**、および**4－5．母親の就労による比較**の結果から、子育てや保育についての考え方、就労と子育ての両立についての価値観などは、保護者自身がどのような保育を経験したかということよりもむしろ、親としてどのように保育を利用し、保育の中で育つ子どもをどのように認識してきたか、ということの効果が大きいのではないかと考えられる。この点について検証するために、親として利用した保育、すなわち子どもが経験した保育によって、保護者の諸変数に差異が見られるかどうかを検討した。

保護者が親として子どもを通わせた保育について、親子のデータがペアでそろっている2091名について分類した結果、①0歳から保育所91名(4.4％)、②1～3歳前から保育所176名(8.5％)、③3歳から保育所438名（21.1％)、④幼稚園985名（47.5％)、⑤保育所だが入所時期不明60名（2.9％)、⑥保育所と幼稚園の両方を経験238名（11.5％)、⑦その他87名（4.2％)、無記入16名であった（**表4-6-0**)。

以下の分析においては、親として利用した保育の種類および保育開始時期（入所時期）による差異を検討するため、①～④の4群間の差について検討する。

就労と子育ておよび保育についての認知、親子関係、社会情緒的発達、行動発達の諸変数を従属変数とし、子どもの保育経験（4水準）による一元配置の分散分析を行い、子どもの保育経験によって各従属変数の平均値に差異が見られるかどうかを検討した（**表4-6-1～表4-6-24**)。多重比較においては、Scheffeの方法およびTukeyの方法を用い、方法により結果が異なる場合はその旨明記した。群間に有意な差異が見

られたものについては、図示した（図4-6-4～図4-6-23）。ただし、群間のサンプルサイズの違いが大きく、統計的検定の信頼性については慎重に検討すべきである。

(1)（自分の）母親の就労の肯定（表4-6-1）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1064)=1.45$; $p=.2256$ n.s.）。保護者自身の乳幼児期における母親の就労についての認識は、子どもにいつからどのような保育を経験させたかということと関連が見られなかった。

(2)保育経験に対する肯定的評価（表4-6-2）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1390)=0.35$; $p=.7857$ n.s.）。保護者自身の保育経験に対する「楽しかった」「行ってよかった」との評価は、子どもにいつからどのような保育を経験させたかということと関連が見られなかった。

(3)分離時における父親希求（表4-6-3）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1462)=1.65$; $p=.1764$ n.s.）。父親に対して「いつも家にいてほしかった」「帰りが遅くて寂しかった」といったように寂しさや心配を感じ、分離時に父親を求める傾向は、子どもにいつからどのような保育を経験させたかということと関連が見られなかった。

(4)父親の普段のゆとりある関わり（表4-6-4）

全体として有意な結果が得られ（$F(3,1448)=3.09$; $p=.0262$）、多重比較の結果、幼稚園＞3歳から保育所、という有意差が見られた。子どもを幼稚園に通わせた群は、3歳から保育所に通わせた群に比べ、保護者自身の父親が休みの日にはよく関わってくれるなど、ゆとりあるかかわりをしてくれたと認識していることが示された。

(5)父親以外の二次的対象による寂しさの軽減（表4-6-5）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1426)=0.64$; $p=.5886$ n.s.）。

(6)分離時における母親希求（表4-6-6）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1418)=0.09$; $p=.9630$ n.s.）。保護者自身が母親との分離に寂しさや心配を感じ、母親を求める傾向が高かったとの認識と、子どもにいつからどのような保育を経験させたかということとは関連が見られなかった。

(7)母親の普段のゆとりある関わり（表4-6-7）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1446)=0.51$; $p=.6748$ n.s.）。母親が休みの日にはよく関わってくれるなど、ゆとりあるかかわりをしてくれたと認識していることと、子どもにいつからどのような保育を経験させたかということとは関連が見られなかった。

(8)母親以外の二次的対象による寂しさの軽減（表4-6-8）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1394)=2.37$; $p=.0689$ n.s.）。

(9)父子関係の安定性（表4-6-9）

全体として有意な結果が得られ（$F(3,1443)=4.13$; $p=.0063$）、多重比較の結果、幼稚園＞1～3歳前から保育所、という有意差が見られた。子どもを幼稚園に通わせた群は、1～3歳前から保育所に通わせた群に比べて、自身の父親との現在の関係がより安定していると認識していることが示された。

(10)母子関係の安定性（表4-6-10）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1476)=0.01$; $p=.9987$ n.s.）。

(11)保育者との関係の安定性（表4-6-11）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1318)=0.13$; $p=.9448$ n.s.）。

(12)父親による虐待（表4-6-12）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1354)=0.55$; $p=.6477$ n.s.）。

(13)母親による虐待（表4-6-13）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1367)=0.94$; $p=.4197$ n.s.）。

(14)保育者による虐待（表4-6-14）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1282)=0.48$; $p=.6973$ n.s.）。

(15)対人関係における適応（表4-6-15）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1586)=1.51$; $p=.2092$ n.s.）。子どもにいつからどのような保育を経験させたかということと、保護者自身の対人関係における適応とは関連が見られなかった。

(16)自尊心（表4-6-16）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1559)=1.12$; $p=.3404$ n.s.）。子どもにいつからどのような保育を経験させたかということと、保護者自身の自尊心の発達とは関連が見られなかった。

(17)外在的行動問題（攻撃性）（表4-6-17）

全体として有意な結果が得られ（$F(3,1624)=5.35$; $p=.0011$）、多重比較の結果、1～3歳前から保育所＞3歳から保育所・幼稚園、という有意差が見られた。子どもを1～3歳から保育所に通わせた群は、3歳以降に保育所に通わせた群および幼稚園群に比べて、かつて保護者自身が未成年の時期に、人に暴力をふるったり、お金や物を取り上げたりするなど攻撃的な行動問題の多かったことが示唆された。

(18)外在的行動問題（非行）（表4-6-18）

全体として有意な結果が得られ（$F(3,1626)=12.13$; $p<.0001$）、多重比較の結果、0歳から保育所・1～3歳前から保育所＞3歳から保育所＞幼稚園、という有意差が見られた（Scheffeの方法では、3歳から保育所群と幼稚園群には有意差なし）。子どもを3歳前から保育所に通わせた群は、3歳以降に保育所に通わせた群および幼稚園群に比べて、かつて保護者自身が未成年の時期に、タバコを吸ったりお酒を飲んだり、ルールを破ったりといった非行につながる行動問題の多かったことが示唆された。

(19)内在的行動問題（表4-6-19）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1630)=0.89$; $p=.4470$ n.s.）。

(20)伝統的性役割観からの自由度（表4-6-20）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1625)=1.72$; $p=.1618$ n.s.）。

(21)三歳児神話の肯定（表4-6-21）

全体として有意な結果が得られ（$F(3,1624)=29.05$; $p<.0001$）、多重比較の結果、幼稚園＞3歳から保育所＞1～3歳前から保育所・0歳から保育所、という有意差が見られた。子どもを幼稚園に通わせた群は、保育所に通わせたいずれの群よりも、また3歳以降に保育所に通わせた群は3歳前から保育所に通わせた群よりも、「子どもが3歳になるころまでは、女性は子育てに専念すべきである」といういわゆる“三歳児神話”を肯定する意識が高いことが示された。

(22)低年齢児保育の肯定（表4-6-22）

全体として有意な結果が得られ（$F(3,1506)=63.16$; $p<.0001$）、多重比較の結果、0歳から保育所＞1～3歳前から保育所＞3歳から保育所＞幼稚園、という有意差が見られた。低年齢からの保育について肯定する意識は、実際に子どもを0歳から保育所に通わせた群が最も高く、1～3歳前から子どもを保育所に通わせた群、3歳以降に保育所に通わせた群の順に低下した。子どもを幼稚園に通わせた群では、低年齢児保育を肯定する態度が最も低かった。

(23)保育所保育（主に3歳以降）の肯定（表4-6-23）

全体として有意な結果が得られ（$F(3,1556)=66.24$; $p<.0001$）、多重比較の結果、0歳から保育所・1～3歳前から保育所・3歳から保育所＞幼稚園、という有意差が見られた。子どもを保育所に通わせた群は、幼稚園に通わせた群に比べて、保育所保育に対して肯定的な認識を持っていることが示された。

(24)親としての応答的かかわり（表4-6-24）

全体として有意な結果は得られなかった（$F(3,1200)=1.90$; $p=.1274$ n.s.）。

保護者が親として利用した保育と保護者自身の心理社会的発達との関連

上記（1）～（24）より明らかになった結果についてまとめ、考察する。

①就労と子育て、保育所保育についての認識

親として利用した保育の違いによって、就労と子育てについての認識、および保育所保育についての認識に差異が見られた。子どもを3歳未満から保育所に通わせた群は、3歳以降に保育所に通わせた群および幼稚園に通わせた群よりも、「子どもが3歳ごろまでは母親が家庭で養育すべき」という認識、すなわち“三歳児神話”を肯定する意識が低かった。また、子どもを保育所に通わせた群は、幼稚園に通わせた群に比べて、保育所保育を肯定的する意識が高かった。さらに、子どもの保育所保育の開始時期が早い群ほど、低年齢児（3歳未満）から保育を経験することについて肯定的な認識を持っていた。

先に検討したように（←**4－4．保育経験による比較**、**4－5．母親の就労による比較**）、子育てと就労についての認識、あるいは保育についての認識は、自身の保育経験や自身の母親の就労によってはほとんど差異が見られなかった。ここで見られた群間の差異は、親として保育を利用する経験、そして保育を経験しながら育つ子どもの姿を通して、就労と子育てについての認識や価値観、保育についての評価があらためて形成されたことを表しているといえるであろう。そして、昨年度分析した子ども調査の結果から、保育所保育を経験した子どもの群も、親と同様に保育所保育に対する評価が高かったことを考え合わせると、現在の中高生が経験した保育は、その経験者である子どもと保護者から、一定の肯定的な評価を得ていると言えるであろう。

②親子関係

親として利用した保育の違いによって、現在の親子関係（中高生の保護者とその親との関係）の安定性や親による被虐待経験（中高生の保護者がその親から受けた虐待）にほとんど差異は見られなかった。現在の父子関係の安定性においてのみ、子どもを幼稚園に通わせた群は、1～3歳の間に保育所に通わせ始めた群よりも安定性を高く認知しているという結果が得られたが、現在の親子関係の認知を規定するのは、やはり親との直接的な関わりの要因であると考えられる。「**4－4．保育経験による比較**」において述べたように、例えば思春期の第二次反抗期における親子関係の再構築がどのようになされたのか、成人期になり自らが親になるという経験を通して親との関係はどのように変化したのか、あるいは親が老いていくという状況をいかに受け入れ、親についての認知がどのように変化しつつあるのか、といった要因が挙げられる。

また、親として利用した保育の違いによって、自身が親として子どもと関わる際にどの程度応答的なかかわりができていたと思うかという認識に差異は見られなかった。相関分析においても、子どもの乳幼児期における親としての応答的関わりと子どもが経験した保育への信頼との間には高い相関が見られず（表4－3－2）、親としてのかかわりの質は、どのような種類の保育を利用したか、あるいはその保育をどの程度信頼していたか、ということではなく、その他の要因によって説明される部分が大きいと考えられる。例えば、「**4－3－2．保育についての評価や態度に関わる変数間の相関**」において述べたような、家庭内での夫婦の協同、地域の子育て支援といったサポートの要因、あるいは「**4－4．保育経験による比較**」において述べたパーソナリティの要因、養護性、子どもの特徴などが、親としての敏感で応答的な養育態度・行動を説明する要因ではないかと推測される。

③社会情緒的発達

対人関係における適応および自尊心の高さには、親として利用した保育の違いによる差異は

見られなかった。「**4－4．保育経験による比較**」「**4－5．母親の就労による比較**」において、対人関係における適応と自尊心の背景にあるのは、親としての有能感やそれに直接関与する対人的なサポートの要因、あるいは、内在的な行動問題とそれをもたらすパーソナリティの要因や社会的・対人的な環境の要因なのではないかと述べた。親として利用した保育の種類によって、保護者が提供された保育サポートの内容やそのサポートが保護者にとってどのような意味を持っていたかは異なっていたと考えられる。現在中高生の子どもが乳幼児であった当時においては、これらの保育サポートが保護者の適応や自尊心に効果を持っていたという可能性もあるだろう。しかし、少なくとも現在の保護者の適応と自尊心の高さに対して、かつて利用した保育の種類が影響を及ぼすことはないといえる。

④行動発達

内在的行動問題（不登校傾向や引きこもり傾向）の高さについては、親として利用した保育の違いによる差異は見られなかった。他方、攻撃的な行動問題については、子どもが1～3歳前から親として保育所を利用した群が3歳以降に保育所あるいは幼稚園を利用した群よりも高く、また非行に関わる行動問題については、子どもが3歳以前に親として保育所を利用した群が最も高く、次に3歳から保育所に通わせた群、幼稚園に通わせた群は最も低いという結果が得られた。行動問題は、保護者に未成年の時期について回答を求めた回顧データであり、親として保育を利用したのは、ほとんどがその後成人になってからの時期と考えられる。したがって、因果関係について推測するとすれば、未成年の時期における内在的行動問題の高さは親になってからの子どもの保育の選択に影響を及ぼさなかったが、攻撃性や非行に関する外在的行動問題が高かった保護者は、子どもに早くから保育を経験させるという選択をした、という推測が成り立つ。この点については、保育の選択にかかわる他の要因、例えば子どもの母親の就労の要因やその背景にある経済的要因などを加えて、今後さらに検討が必要である。

4－7．大学生調査の結果概要

大学生、短大生、専門学校生を対象に実施した質問紙調査では、回収率の低さや男女比の偏り（女性が81.6％）などにより、昨年度分析を行った中高生サンプルとはその代表性が大きく異なっている。また、福祉や保育を専攻する学生が相対的に多く（70.9％）、保育についての評価や三歳児神話に対する態度が一般的な大学生サンプルとはそもそも異なる可能性がある。したがって、中高生のデータと大学生のデータを単純に比較することはできず、本調査において中高生と大学生の間に差異が見られたとしても、それが発達的変化であるとは言い切れない。

また、大学生サンプルだけを取り上げても、福祉や保育を専攻する学生には女性が圧倒的に多く、それ以外の学部学科には男性が比較的多いなど、例えば学部学科による差異が見られたとしてもそれが専攻による差異なのか、あるいは性差なのかといったことを検討することが難しい。したがって、ここではあえて統計的分析をせず、結果の概略をごく簡単に述べるにとどめる。

まず、大学生は中高生よりも三歳児神話を肯定する意識が低く、低年齢児保育を肯定する意識が高い傾向があった。しかし、伝統的な性役割観を肯定する意識はむしろ高く、今回の調査に協力した大学生が、就労と子育てについて中高生よりも全般的に柔軟な認識をもっているとは言えない。

大学生のうち、福祉や保育を専攻する学生はそれ以外の学生に比べて、自身の保育経験が楽しかった、よかったと評価する程度や、保育者との関係について安定していたと認識する程度が高いのではないかと予想されたが、ほとんど

同値であった。性役割観や三歳児神話を肯定する意識もほとんど差異は見られなかった。主に3歳以上の保育所保育については、福祉や保育を専攻する学生のほうがやや評価が高い傾向が見られたが、低年齢児保育に対する評価においてはほとんど差異が見られなかった。今回の調査に協力を得られた大学生サンプルにおいては、福祉や保育を専攻する学生とそれ以外の学生とで、就労と子育てについての認識や保育所保育への評価はそれほど変わらないのではないかと考えられる。

ただし自由記述において、福祉や保育を専攻する学生には自らの保育を肯定的に評価する叙述が多く見られた。保育に関する肯定的な思い出が、保育を専攻するという進路選択を後押しした可能性が示唆された。

5．結論

ここでは、主に保護者調査の結果についてまとめ、最後に昨年度分析を行った中高生データを含めて総括的な考察を行う。

就労と子育てについての認識（性役割観や三歳児神話への意識）の発達には、自らの保育経験の違いや乳幼児期における母親の就労による差異がほとんど見られなかった。昨年度調査の分析において、中高生の子育てと就労に関する価値観や信念体系、および保育所保育についての認識や評価は、自分の家族（親個人・夫婦としての親など）のあり方や自らの保育経験に裏づけられた形で発達していくことが示唆されており、少なくとも思春期・青年期までは、自らの保育経験にしたがって就労と子育てについての価値観が形成されていたと推測される。子育てをしている成人期の現在、それらの価値観や信念体系に自身の保育経験による差異が見られないというこの結果は、思春期・青年期以後、何らかの要因によって、これらの価値観や信念体系の改変、再形成が起こるということを示唆している。親として保育を利用した経験は、おそらくその要因の一つであると考えられる。子どもを3歳未満から保育所に通わせた群は、3歳以降に保育所に通わせた群および幼稚園に通わせた群よりも、「子どもが3歳ごろまでは母親が家庭で養育すべき」という認識、すなわち“三歳児神話”を肯定する意識が低く、また、子どもを保育所に通わせた群は、幼稚園に通わせた群に比べて、保育所保育を肯定的する意識が高かった。さらに、子どもの保育所保育の開始時期が早い群ほど、低年齢児（3歳未満）から保育を経験することについて肯定的な認識を持っていた。このような差異は、親として保育を利用する経験、そして保育を経験しながら育つ子どもの姿を通して、就労と子育てについての認識や価値観、保育についての評価があらためて形成されたことを表しているといえるであろう。

現在の親子関係（中高生の保護者とその親との関係）の安定性や親による被虐待経験（中高生の保護者がその親から受けた虐待）については、保育経験の違いや乳幼児期における母親の就労による差異、また親として利用した保育の違いによる差異はほとんど見られなかった。母親が就労していた群、低年齢から保育を経験していた群は、たしかに乳幼児期において親との分離に寂しさを感じていたとの認識が高く、またゆとりをもって関わってもらったという認識が低い。これらの認識は、安定した親子関係の形成にとってリスクである。しかし、思春期から成人期までのいずれの時期においても、現在の親子関係の安定性に、母親の就労や保育経験による差異は見られない。そこにはおそらく、母親の就労とそれに伴う親子分離の影響を補償するような要因の関与があると考えられる。家族要因、家族の関係性におけるダイナミクス、保育の要因、社会的経験の要因、あるいはアイデンティティの発達や内省的自己の発達など個人内の要因について、検討を進める必要がある。さらに、成人期における親子関係の認知には、

長期にわたる親との関わりの歴史が関連していると考えられる。例えば思春期の第二次反抗期における親子関係の再構築がどのようになされたのか、成人期になり自らが親になるという経験を通して親との関係はどのように変化したのか、あるいは親が老いていくという状況をいかに受け入れ、親についての認知がどのように変化しつつあるのかといった要因が、時系列に沿って重なり合いながら、成人期における親子関係の認知に影響を与えていると考えられよう。

対人関係における適応や自尊心の発達は、幼少時の保育経験やそれにまつわる父母についての認識というよりも、むしろ、成長後の親としての有能感やそれに直接関与する対人的なサポートの要因、あるいは、内在的な行動問題とそれをもたらすパーソナリティの要因や社会的・対人的な環境の要因なのではないかと推測される。これらについては、今後さらに検討が必要である。

行動問題の発達について、攻撃的行動問題や非行に関わる外在的行動問題、不登校傾向や引きこもり傾向に関わる内在的行動問題のいずれにおいても、保育経験による差異および母親の就労による差異は見られなかった。これらの行動問題は、未成年の時期を回顧して回答されたものであるが、少なくとも保護者自身の認知において、未成年の時期における外在的・内在的行動問題は保育経験や母親の就労とは関連がないことが示された。中高生データの分析からは、思春期・青年期における行動問題の発達メカニズムに関して、パーソナリティ発達の要因や家庭環境の要因、仲間関係など社会的対人的要因等との交絡をさらに検討する必要があることが示されていた。この点に関しては、今後さらに検討が必要である。

昨年度分析を行った中高生のデータおよび今年度分析した保護者のデータから、乳幼児期における保育経験、特に発達早期からの保育経験が、思春期、青年期、成人期における親子関係の発達や対人適応、自尊心の発達を阻害することはないといえる。また、就労と子育てについての認識や価値観、保育についての評価は、思春期・青年期までは自らの保育経験や親の就労を肯定的に受け入れるかたちで形成され、成人期以降は親として保育を利用する経験、そして保育を経験しながら育つ子どもの姿を通して、あらためてその改変や再形成が行われることが示された。保育は、それを利用する子どものみならず、その親の就労と子育てについての価値観や保育所保育に対する評価の形成にも大きな影響を与えるものと考えられる。そして、保育所保育を経験した子どもも保護者も、就労と子育ての両立を価値あるものと捉え、保育を肯定的に評価する態度を形成していたことは、彼らに提供され、利用された保育サービスが、一定の高い評価を得ていることを表しているといえるであろう。私たちは今、その評価を喜びながらも、あらためてこれまでの保育を問い直す必要があるだろう。自ら経験した保育が、福祉や保育を専攻する大学生の進路選択を後押ししたと考えられるように、保育にはそれを経験したひとりの人の人生を方向づけるほどの大きな力があると考えられる。それは逆に、そのような保育の力が、ひとりの人の人生を否定的な方向へと導いてしまうことがあるかもしれないということも表している。そのことを自覚しながら、子どもと保護者の発達を援助し、子育てを支援する保育とはどのような保育であるのか、これからの保育のあり方について、さらに真摯に探究していく必要がある。